Manapio 放送大学機関リポジトリ The Open University of Japan Repository

社会人のための初歩の外国語教育 ： 面接授業「初歩のフランス語」「初歩のインドネシア語」の教材制作と全体構想

著者	工藤 庸子，井上 のぞみ，笠間 直穂子，鈴木 順子，増原 綾子，南 玲子
雑誌名	放送大学研究年報
巻	24
ページ	35-44
発行年	2007-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1146/00007485/

放送大学研究年報　第24号（2006）35-44頁
Journal of the University of the Air, No. 24（2006）pp.35-44

社会人のための初歩の外国語教育

—面接授業「初歩のフランス語」「初歩のインドネシア語」の教材制作と全体構想—

工　藤　庸　子[1]・井　上　のぞみ[2]・笠　間　直穂子[3]・
鈴　木　順　子[4]・増　原　綾　子[5]・南　　玲　子[6]

L'Enseignement des langues étrangères pour débutants dans le cadre de la formation permanente et, plus particulièrement, celui des langues française et indonésienne.

Yoko KUDO, Nozomi INOUE, Naoko KASAMA, Junko SUZUKI, Ayako MASUHARA, Reiko MINAMI

Résumé

Les cours de langues étrangères ont été créés dans notre université en complément du télé-enseignement qui est destiné à un public adulte. Il arrive que les étudiants aient des difficultés pour apprendre une langue nouvelle en dépit de leur bonne volonté, et ce, en particulier chez ceux qui ont un âge plus ou moins avancé. En revanche, leur intérêt reste vif vis-à-vis des cultures étrangères et de la société internationale d'aujourd'hui. Notre tâche est donc de développer une méthode d'enseignement adaptée à ce public en associant des éléments d'apprentissage de la langue avec ceux d'une initiation aux différentes cultures.

Alors qu'un changement de programmation en télé-enseignement demande un travail et un budget considérables, il est relativement facile d'introduire un nouveau cours en classe. Nous profiterons de cet avantage pour élargir le choix des langues que les étudiants pourront apprendre. En plus des cours existants : français, allemand, espagnol, russe, chinois, coréen et arabe, l'année 2006 a vu naître les cours d'italien, d'indonésien, de tagal et de portugais.

Avec l'aide de jeunes chercheurs, nous avons créé en outre de nouveaux outils pédagogiques en matière de langues française et indonésienne :

1) un DVD pour le cours de français réalisé à partir d'images prises dans le Sud et le Nord-Ouest de la France ainsi qu'au Mali, en Afrique de l'Ouest. Il devrait encourager les étudiants à avoir une nouvelle vue sur le monde francophone, plus variée sur le plan culturel et linguistique, ce qui n'a pas toujours été mis en avant dans l'enseignement traditionnel du français.
2) Sebagai salah satu bahan pelajaran bahasa Indonesia, pengucapan alfabet dan percakapan sehari-hari telah direkam dalam DVD. Selain itu, foto-foto digital yang telah diambil, terutama mengenai proses pembuatan kain batik tradisional di Indonesia, akan dimasukkan ke DVD yang lain pada tahun depan.

要　旨

外国語の面接授業は本来、放送授業をサポートすることを目的として開設されたものである。とりわけ高い年齢層の受講者のなかには、学習意欲はあるにもかかわらず、新しい外国語を習得するときに多大の困難を感じる者も少なくない。しかし一方で、社会人としての経験を積んだ学生は、知的好奇心が旺盛であり、現代世界に開かれた問題意識をもっている。そうした特性を活かすために、語学の訓練と「異文化理解」の素材を適切に組み合わせた教材を開発し、効果的なモティヴェーション教育を行うことをめざしている。

面接授業は放送授業にくらべ容易に新しい科目を開講できるという利点もある。平成18年度２学期には、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、中国語、韓国語、アラビア語に加え、イタリア語、インドネシア語、フィリピン語（タガログ語）、ポルトガル語が開講されており、多様化への努力は一定の成果

[1] 放送大学教授（「人間の探究」専攻）　[2] 立教大学非常勤講師、岩手大学非常勤講師　[3] 日本学術振興会特別研究員、上智大学非常勤講師、立教大学非常勤講師　[4] 明治学院大学非常勤講師、東京女子大学非常勤講師　[5] 大東文化大学非常勤講師、東京大学社会科学研究所研究支援推進員　[6] 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻教務補佐員

を挙げている。

現在、若手研究者たちの協力を得て重点的にとり組んでいるフランス語とインドネシア語の教材開発の特徴を以下に併記する。

1．フランス語面接授業補助教材DVD：フランス国内では南と北西の地方で取材を行ったほか、フランス語圏マリ共和国のオリジナル素材を豊富に使用した。パリへの憧れと標準語の尊重というフランス語学習の伝統に対し、新しい方向性を提案するものであり、多言語主義的な発想と、文化の多元性を尊重する姿勢が基調となっている。

2．インドネシア語面接授業補助教材DVD：スタジオ収録により、ABC、発音の原則、簡単なあいさつなどの語学教材を制作した。さらにインドネシアにおける伝統的なろうけつ染め（バティック）の製作過程など特徴ある画像・映像データを収集したところであり、平成19年度には、この素材を編集して文化的なテーマを盛りこんだDVDを制作する予定である。

平成17年度に開設した初修外国語の面接授業「初歩の○○語」シリーズに関する報告と自己点検を行うことが本論考の目的であり、検討内容は放送大学研究年報23号（平成17年）に掲載した「生涯学習と初修外国語—面接授業『初歩のフランス語』の教材制作と全体構想—」につづくものである。

Ⅰ　学生のニーズと全体構想

1．放送授業と面接授業の関連：初修外国語の放送教材は「入門Ⅰ」「入門Ⅱ」を2学期にわたり履修することで、最小限の初級文法を習得することを目標として構成されている。放送授業は他の講義と同じく45分の授業が週に1回という頻度であるが、これは一般の大学の文系カリキュラムにおける初修外国語の授業と比較した場合、実質的な時間数としては4分の1、もしくは6分の1に相当する。このように合計時間数が極端に少ないため、教材の内容がある程度密度の高いものになることは避けがたいといえよう。その一方で、放送大学に在籍する学生たちの平均的な語学習得能力という問題がある。学生たちのなかには英語の習得についても障害やコンプレックスを抱えている者が少なからずおり、大半の学生が、放送授業のみで初修外国語を履修することに多大の困難を覚えているというのが実情であると思われる。

学生の水準と放送授業の制約という二重の負荷に対応するために、面接授業で最大限の工夫と努力を重ねてゆきたいと考えている。外国語の面接授業は、まず首都圏でモデルをつくり、地方の学習センターにも提案する予定である。平成18年度2学期には、大阪学習センターで「初歩のフランス語」の集中講義が開講される。

2．授業内容と開講数について：すべての初修外国語について、履修者数を学期ごとに調査して開講数や開講形式を再検討するという方法をとっている。「初歩の○○語」の履修者数が全体的に伸びる一方で、本格的な語学習得をめざす「入門Ⅰ」を継続履修する者は、残念ながら期待するほど増加していない。現状においては「入門Ⅰ」の開講は南関東全体で1講義が適正と思われる。

放送大学の学生には、かつて学んだ外国語をリフレッシュするという潜在的な需要があるといわれている。この見えないニーズを発掘するために、平成18年度2学期から、シャンソン、童話、DVDなどを教材にして、放送教材と直結はしないが学習意欲を誘うと思われる授業を試行的に行っている。

3．外国語の多様化という課題：平成16年度まで、面接授業で開講される初修外国語は、放送授業で開講されている科目、すなわちフランス語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、中国語、韓国語のみであった。放送授業において外国語の多様化をめざすことは容易ではないが、これに対して面接授業では比較的簡単に新しい科目を立ち上げることができる。平成18年度2学期において、放送授業にはないが面接授業で新しく開講された外国語は、イタリア語、インドネシア語、フィリピン語（タガログ語）、ポルトガル語の4科目であり、平成19年度はベトナム語をこれに加える予定である。

平成17年度から放送授業と同時に開講されたアラビア語の面接授業をふくめ、非ヨーロッパ系の言語に対する学生の関心は総じて高いといえる。平成18年度1学期に初めて登場した東南アジアの言語（インドネシア語、フィリピン語）は、履修希望者が募集人数をはるかに超えるという盛況ぶりだった。

以上のような現状認識をふまえ、当面は「初歩の○○語」の授業を多様化し、その内容を充実させることが、学生のニーズに応える方向性であると判断している。

4．異文化理解と初歩の外国語教育：一般的傾向として、放送大学の学生は、平均年齢が高いためもあり、文法や単語を習得する能力においては20歳前後の大学生にくらべて劣るといえるだろう。しかし大半の学生は、知的好奇心がつよく学習意欲も旺盛である。また社会人としての経験を積んでいるところから、現代世界に開かれた問題関心をもっている。

このような受講者の特性を活かしたプログラムを立ち上げるために、語学の訓練と「異文化理解」の素材を適切に組み合わせ、効果的なモティヴェーション教育を行うことをめざしている。具体的な講義の内容については、担当講師のレポートをご覧いただきたい。講師には留学経験が長く、語学や文学だけでなく地域

文化研究や国際関係論などを専攻する若手研究者を優先して配置している。それぞれが共通教材を出発点として専門性に裏づけられた話題を提供し、あるいはシャンソンなどの娯楽性のある素材から教養教育の要素を引き出して、個性的な授業を展開していることがおわかりいただけるはずである。

専門研究者が初歩の外国語を教えることのメリットは大きい。とりわけ地域社会に多くの住民がいるアジア諸国の言語について、この点を強調しておきたい。言葉を通してグローバル化した世界に関心を向け、身近に住む外国人たち、外国出身者たちの文化を尊重する姿勢を身につければ、そのことにより外国語習得への動機も補強されるはずである。こうした相乗効果をもたらすことのできる質の高い講師陣をそろえ、一般市民はもとより、福祉・医療・教育等の職業に携わる人びとに、アジアの諸言語と文化を学ぶ機会を提供することを将来の目標と考えている。

Ⅱ　DVDを中心とするフランス語補助教材の開発

1．経緯と成果について：平成17年度放送大学振興会機関助成と特別研究費の援助を得て以下の教材を開発することができた。

- **フランス語面接授業補助教材DVD：**「初歩のフランス語」から「フランス語基礎」まで多様なレヴェルで使用可能。業者発注によりジャケットつきDVD200枚を制作。
- **フランス語面接授業補助教材DVD bis：**本編DVDに続く語学教材と「環境ビデオ」を組み合わせた。「環境ビデオ」は長時間に及ぶ面接授業の休み時間に流す「癒し」の映像。ただし内容的には「フランス語基礎」の印刷教材に対応しており、文化的な教材としても充分に活用できる。DVD編集および100枚のコピー制作を業者に依頼。
- **オリジナル音声CD：**内容は以下の通り
  ①「初歩のフランス語」カラー・コピー教材に対応した発音練習
  ②「フランス語入門Ⅰ」の印刷教材添付CDの補足
  ③「フランス語入門Ⅰ」練習問題に即した音声教材

ICレコーダーによりネイティヴの音声を研究室で収録。チャプター編集なども企画グループの一員が行った。文字通り「手製」のCDだが、特に後半は上位機種を用いて工夫した甲斐があり、音声の質が高まっている。

- **その他の教材と教師用ガイダンス**（これらは印刷製本してもコストが見合わないため、担当講師全員にハードコピーとデータのCD-Rを配布している）
  ①「初歩のフランス語」（平成17年度制作教材の訂正版）カラー・コピー教材
  ②「初歩のフランス語」教師用ガイダンス
  ③「フランス語入門Ⅰ」練習問題（学生配布用）
  ④「DVD教材」教師用ガイダンス
  ・内容説明
  ・取材地に関する紹介
  ゲランドおよびフランス北西の都市
  カルカッソンヌとミディ運河
  アフリカ、マリ共和国
  ・文字データ（収録された音声のフランス語データ、これを素材に聴き取りや作文の練習問題を作成することができる）

以上の教材や資料は、南関東学習センターで行われる面接授業が共有する教育プログラムとなる。これらはあくまでも「共通教材」であり、全員が同じ内容の授業を行うことを前提とする「統一教材」ではない。

2．DVDの内容と構想：本編およびbisの内容は以下の通りである。

フランス語補助教材（本編）
Ⅰ　Vocabulaire pour les débutants
—*Voyage en Bretagne et retour à Paris*
—*Voyage au Mali*
Ⅱ　Expressions
—*Voyage au Mali*
—*Connaissez-vous la France ?*
—*À Guérande*
Ⅲ　Langue vivante
—*Monsieur Pachon fait ses courses au marché de Carcassonne*

フランス語補助教材bis
Ⅰ　Langue vivante（suite）
Dans un café de Carcassonne
—*Comment Monsieur Pachon est devenu cuisinier*
—*D'où vient le nom de Carcassonne ? La légende de Dame Carcas*
Ⅱ　Promenade dans le Languedoc（環境ビデオ）
—*Le château fort de Carcassonne*
—*Un flûtiste sur la terrasse du château*
—*Une partie de pétanque sur la place*
—*Le canal du midi*
Ⅲ　Promenade à Guérande（環境ビデオ）

このDVD教材は、パリへの憧れと標準語の尊重というフランス語学習の伝統からやや距離をおいたところで構想されている。フランス国内においては、南と北西の地方で独自の取材を行ったほか、アフリカの旧フランス植民地マリ共和国の画像も豊富に入手することができた。これらの資料はフランスに留学中の若手研究者の協力によって収集されたものである。

活きたフランス語 langue vivanteを通して風土に根づいた言葉の生命力を映像とともに感じとることは目標のひとつである。取材地のひとつカルカッソンヌの市場で話されている言葉は強いミディのアクセントをもっている。地域の言語と個性的な地方文化を積極的に紹介することは、文化の多元性を尊重する姿勢につながるはずである。この教材の基底にあるのは、特定の言語や標準語を特権化せず、地方語やマイノリティの言語に目をむける多言語主義的な発想であるといえる。

以上の考え方は、全国に学習センターをもち、地域社会との連携をめざす放送大学の教育プログラムにふさわしいものであると自認している。

3．平成18年度制作のフランス語面接授業補助教材DVD：東京大学教養学部フランス語部会に所属し、放送大学では「フランス語入門ⅠⅡ」を担当する鈴木啓二教授、原和之助教授との連携プログラムとして、新たにDVDを制作している。これまでの教材に不足していた発音練習を主たる目標とする教材である。

Ⅲ　インドネシア語面接授業補助教材DVDの開発

増原綾子面接授業担当講師が構想と制作を担当した。ネイティヴ２名の協力を得て、発音の原則と簡単な会話練習をスタジオで収録し、DVD教材を制作することができた。その内容は以下の通りである。

① アルファベットの発音：アルファベット、単母音、二重母音、注意すべき子音の発音
② あいさつ：朝・昼・晩のあいさつ、お礼、謝罪の言葉など
③ 自己紹介：インドネシア人男性、インドネシア人女性、日本人男性、日本人女性の自己紹介、日本人女性とインドネシア人男性の自己紹介会話
④ 数字：１～12、20、21、100、1000、10000、100000
⑤ 買い物での表現：「値段はいくらですか」、「これをください」、「高すぎます」、「負けてください」など
⑥ 屋台やレストランでの表現：料理の注文の仕方
⑦ 食事のときに使える表現：「おいしいです」、「ご飯のお代わりをください」、「コーヒーをください」など
⑧ その他時間や場所をたずねる表現

なお、インドネシア語については、平成18年夏に現地取材により画像と映像を豊富に収集することができた。これを素材として平成19年度に文化的な色彩の濃いDVD教材を制作する予定である。

インドネシア語の積極的な企画をモデルとし、意欲ある若手研究者の参加を求めることにより、専任教員のいない外国語についても、徐々に魅力的な補助教材を整備してゆくことが可能であると考えている。

（文責　工藤）

Ⅳ　授業報告

○「初歩のインドネシア語」　東京文京学習センター（夏期集中型授業）

2006年８月６日（Ⅰ～Ⅲ限）、８月13日（Ⅱ～Ⅲ限）

担当講師　押川典昭、増原綾子

「初歩のインドネシア語」は、今年度、放送大学で初めて開設されたインドネシア語の授業である。初めてインドネシア語に触れる学生を対象として基本的なインドネシア語の文法と簡単な会話表現を学習することを目的とし、同時にインドネシアの社会と文化について解説を加えることで、中国や韓国以外の「身近なアジアの隣人」について理解を深めてもらうことを目指した。初回に行ったアンケートでは、初学者がほとんどであったが、「アジアについて学びたい」「東南アジアについてもっと知りたい」という意欲を持った学生が多かった。東南アジアには日系企業が数多く進出しており、近年は日本からの旅行者数も増え、この地域からの留学生や研修生（労働者）の受け入れ数も増加している。日本と不可分の関係性を持った隣人としての認識が醸成されつつあり、この地域の言葉や社会について学んでみたいという学生が増えているのではないかとの印象を持った。

授業は、初回の最初の１時間を押川が担当し、あとは増原が行った。１回の授業の中で、〈文法〉、〈会話〉、〈社会や文化についての解説〉、〈音楽〉というかたちでメリハリをつけることで、まったく新しい語彙や文法を目にした学生に負担を感じさせないよう心がけた。テキストとしては、インドネシア語の特徴・文法のしくみ（全３ページ）を押川が用意し、増原はインドネシア語DVD教材に合わせてつくった「基礎文法・会話練習用テキスト」（全７ページ）と「インドネシアの社会と文化：解説資料」（全７ページ）を用意した。

以下で、授業の内容について説明していきたい。

第１回：インドネシア語の特徴とアルファベット

まず、押川がインドネシア語の特徴と文法のしくみについて概説した。とくにインドネシア語と英語との相違点について注意を促しつつ、インドネシア語の語順や単語の派生の仕方などについてわかりやすく解説し、学生から出たさまざまな質問にていねいに答えた。

そのあと、増原が５回分の授業の構成について説明した上で、DVD教材を使いながら、アルファベットと母音・注意すべき子音の発音練習を行った。ネイティヴの口や舌の動きを見てもらい、日本人には難しい［l］と［r］、［n］と［ng］の発音の違い、また発音を間違えやすい［c］や［v］については繰り返し練習を行った。

〈解説〉では、イントロダクションを兼ねて「イン

ドネシアのプロフィール」と題し、アジア世界における島嶼部東南アジアの歴史的な位置づけや民族の多様性について紹介した。この地域は紀元1世紀の頃から中国とローマ帝国の貿易の中継地の一つであり、「海」を媒介につながっていた東西の交易ネットワークの中に組み込まれていたために、インド、中国、中東、ヨーロッパなど多様な地域から人々が流入した。インドネシア語に、サンスクリット語やアラビア語、中国語、オランダ語、ポルトガル語、英語などが起源となっている語彙が多いのはこうした理由からであり、外に対して開かれているという地域の性格が言語の特徴に反映されていることを説明した。

第2回：あいさつ

まず〈会話〉では、DVD教材を見ながら、「こんにちは」「お元気ですか」「ありがとう」「ごめんなさい」などの基本的なあいさつの練習を行った。発音が易しいこともあって積極的に声を出す学生が多かった。あいさつとともに、インドネシア人の朝・昼・夜の過ごし方や生活を紹介した。〈文法〉では、人称代名詞と親族名称を学習した。人称代名詞では、「私たち」という言葉に「話し相手を含まない私たち」kamiと「話し相手を含む私たち」kitaの2種類があることをとくに説明した。親族名称では、「家族」keluargaや「兄弟」saudaraなどのような言葉が、文脈によってはもっと広い「親族」の意味で使われることもあるなど、「家族」や「兄弟」という言葉が指す範囲が日本語と異なる点について理解してもらえるように努めた。また、結婚や子供の有無などを尋ねることについて、インドネシアでは抵抗なく会話の中に現れ、日本とは異なるコミュニケーション習慣を持っていることを説明した。

〈解説〉では、インドネシア前史とインドネシア共和国の政治史を紹介した。インド文化の流入からイスラーム化、ヨーロッパ諸国による進出と植民地化などを説明したうえで、ナショナリズム運動と日本軍政期、オランダからの独立戦争、スカルノ時代の政治的混乱とスハルトによる独裁、民主化まで、激動の現代史を振り返った。〈音楽〉はこうしたインドネシア史を意識して、ポルトガル音楽の影響を受けたクロンチョンを選んだ。クロンチョンはポルトガル移民の音楽が土着の音楽と交じり合いながら、20世紀初頭に生まれた音楽である。ナショナリズム運動がさかんになった頃につくられた歌詞には祖国への愛がつづられ、日本でも有名な「ブンガワン・ソロ」は日本軍政期に非常に流行した歌で、多くの日本人がこの歌のメロディーを覚えて日本に帰国した。こういった音楽や歌詞の背景を説明しながら、メロディーにのせてインドネシア語のリズムと発音を聞いてもらった。

第3回：自己紹介

〈文法〉では指示詞・指示代名詞と疑問詞「なに」「誰」を覚えてもらい、「わたしの名前は～です」「わたしは日本人です」といった基本的な自己紹介を練習した。〈会話〉では、DVD教材でインドネシア人男性・インドネシア人女性・日本人男性・日本人女性の自己紹介例をそれぞれ見てもらい、発音練習を行った。学生を指名してそれぞれ自己紹介をしてもらい、そのあと、DVD教材で日本人女性とインドネシア人男性が自己紹介し合う会話を参照しながら、もう一度自己紹介の練習を行った。

〈解説〉では、インドネシアで中心的な位置を占めるジャワの文化と社会について説明した。インドの影響を受けたジャワでは、王族・貴族などの社会階級が存在する。複雑な敬語体系を持ったジャワ語はそのようなジャワ社会の上下関係や階級制度を反映した言葉であったがゆえに、インドネシアのマジョリティを構成するジャワ人の母語であるにもかかわらず、インドネシアの国語とはなりえなかったことを説明した。〈音楽〉は、このジャワから、伝統的なガムランを使った宮廷音楽と、ポップ・ジャワと呼ばれる近年のポップ・ミュージックを聞かせた。荘厳な王族・貴族の音楽と、明るくテンポのよい民衆の音楽との対比を、学生にも感じ取ってもらえたようである。

第4回：数と動詞

まず、前週の授業で学んだ文法と会話の復習を行った。そのあと、〈文法〉ではDVD教材を使って数字を1～12、20～21、100、1000、10000、100000まで練習し、語根動詞と否定詞の用法について説明した。英語やフランス語などと異なり、インドネシア語には人称や時制による動詞の活用がなく、語根にさまざまな接頭辞と接尾辞がつくことで単語が派生していく。例えば、ajar（学ぶ）という語根に接頭辞berがついたber動詞になればbelajar（学ぶ）、接頭辞meがついたme動詞になればmengajar（教える）、人を表すpeの接頭辞がつけばpelajar（学生）、名詞をつくる接頭辞peと接尾辞anがつけばpelajaran（学習）となる。こうした単語の派生の仕方に興味を感じた学生も少なくなかった。

〈会話〉では、覚えた数字や動詞を使ってDVD教材の中の買い物の会話表現を練習し、買い物をする場合にインドネシア人とどのようなコミュニケーションをとれば、気持ちよく交渉を行うことができるかを説明した。〈解説〉では、インドネシアにおけるイスラームの信仰と習慣について説明した。インド文化の土壌の上に土着化したインドネシアのイスラームは他地域と比べても寛容であると言われ、それが信仰実践や生活習慣の中にどのように表れているのかを解説した。〈音楽〉は、インドネシアでも活動しているマレーシア人のイスラーム音楽グループによる« Mari kita doa »（「さあ、お祈りをしよう」）を聴かせた。この歌では、覚えやすいメロディーにのせて、イスラームの五行の一つである1日5回の礼拝について、それぞれの礼拝の意味や方法をマレーシア語の歌詞で説明している。若干ながら、インドネシア語の兄弟言語であるマレー

シア語とインドネシア語との言葉の違いにも触れることができた。

第５回：食事のときの表現、時間や場所をたずねる表現

まず、DVD教材でレストランでのウェイターと客とのやりとりを聞いてもらい、インドネシア料理の特徴や食事のマナーなどについて解説を加えながら、料理の注文の仕方について会話練習を行った。また、同じくDVD教材を使って、「いつ」「何時」「どこで」「なぜ」「どうやって」などの疑問詞を使った表現の練習を行った。休憩をはさんで、インドネシア人留学生のパダン・ウィチャクソノさん（東京大学大学院博士課程在籍）に登場してもらい、日本語で学生とディスカッションをしてもらった。学生からはインドネシアの地方自治や華人問題、日本での生活など活発に質問が出て、インドネシア語初学者が実際にインドネシア人と話をする貴重な機会となった。最後に、５回の授業で学んだインドネシア語の表現について、パダンさんと発音練習を行った。時間が足りずに復習のために用意していたテストができなかったのは残念であったが、ネイティヴとの発音練習によって学生にインドネシア語の発音やリズムを肌で感じてもらうことを優先させた。授業の最後に書いてもらったアンケートでは、このパダンさんとの触れ合いはかなり好評であった。

最後のアンケートでは、授業の全体的な構成についてもおおむね好評だったと思う。インドネシア語の習熟度をはかるテストはとくに行わず、成績は出席の回数で付けたが、インドネシアとインドネシア語に対する興味を引き出すことには十分に成功したと言っていいだろう。

（文責　増原）

○「初歩のフランス語」　神奈川学習センター（土日型授業）

2006年５月13日（Ⅱ～Ⅲ限）、20日（Ⅱ～Ⅲ限）、27日（Ⅱ限）

担当講師　工藤　庸子、鈴木　順子

第１回：ABC

導入として、あいさつBonjourその他を練習した。授業方針の説明に続き初回アンケートを実施。ほとんどが初心者であった。アルファベット発音のCDを聞き、講師の後について発音練習を行う。発音が難しい母音・子音を含む文字（E、G、H、J、Q、R、U、Y）は、口の形や音の出し方を説明しながら丁寧に練習した。また、主な母音・子音の発音記号を取上げ、音と照合した。さらに自分の名前をアルファベットで書いて読めるよう練習し、何人かに発表してもらった。その際、必要最低限の綴り字の読み方（h・語末のe・子音字は読まない）を解説した。良く使われる略号の書き取り・発音も行った。

次にDVD教材のVocabulaire pour les débutantsの冒頭部分を、解説をはさまず見せたのだが、学生の反応は非常に鈍かった。使用する際には、DVDをこまめに止めながら、画面や単語の説明を加え、繰り返し発音をさせることが必須であることを痛感した。カラー教材の「あいさつ」をさらに学び、最後にシャンソンの« Aux Champs-Élysées »を聴いて、縮約や複母音字などを解説してから、サビの部分を歌詞を見ながら皆で歌った。

第２回：自己紹介

自己紹介の仕方を学ぶ。それに伴って、鼻母音、エリジョン・リエゾンなど、発音に必要最低限の文法事項の解説をした。二人一組で会話練習。実はフランス人に名前を日本風に発音してもらうためには綴り方に工夫が必要なことなどを説明、綴りと発音の関係に対する関心を高めた。職業と出身地に関する表現も発音練習。その際、男性・女性名詞を区別することを説明し、再び二人一組でトータルな自己紹介練習をする。何組かが発表。休み時間は、« Aux Champs-Élysées »を含むいくつかのシャンソンを流した。

DVDをもう一度学習した。カルカッソンヌ市場の様子を見せ、画面の解説を加えつつ出てきた単語を繰り返し発音したところ、今回は皆積極的に参加していた。最後に第１・２回の総復習をし、来週までの課題を出す。« Aux Champs-Élysées »をもう一度歌い、Au revoirの練習をして、初日を終えた。

第３回：パリ…食文化中心に

前回の復習小テストとその他重要ポイントの復習。共通教材『簡単な表現』を学ぶ。次にDVDのパリの部分、及びカラー教材の「パリ」を参照し、画像・写真・地図を使った都市の解説を行う。その間も、出てきた単語の発音を頻繁にさせて常に学生が積極的な参加姿勢を保てるよう気をつけた。パリと身近な東京の簡単な比較をして理解の一助とした。さらにテーマをパリの食文化に絞り、西川恵『エリゼ宮の食卓』新潮文庫を紹介。レストランの簡単なメニューをプリントで用意し、よく使う単語の発音、パリにおける外食文化の解説をした。また他方、佐藤真『パリっ子の食卓』河出書房新社を用いて、パリ人の家庭料理の楽しみ方も紹介した。

第４回：フランス諸地方…食文化中心に

数（１～12）を暗唱できるまで練習した。語学教材ビデオ『ボンジュール・パリ』の中の子供達が数を数えるシーンを見、自分たちもそれに合わせて発声してみて、楽しみつつやる気を高めた。次にDVDを使って、フランスの地方についての解説を行う。特にトゥール地方における食文化に注目した。トゥール地方を扱ったDVDを見せて大体の解説を行った後、語学教材ビデオ『ボンジュール・パリ』の中から抜粋したトゥール旅行の課を見せ、街の散策風景やトゥールの有

名レストランでの食事作法・郷土料理を学んだ。さらに、プリント（フランス各地の特産品紹介）を用いて、フランスの食文化を概観しつつ、その中でトゥール地方の食文化の特色を理解した。

シャンソン« Aux Champs-Élysées »の歌唱練習。歌う部分をさらに増やす。続いて、カラー教材の「カフェにて」の説明。第３回以来、食文化を学ぶ中で取り上げてきたDVD・ビデオと関連づけて解説・会話練習するよう心がけた。二人一組で練習し、何組かに発表してもらう。来週の小テストの予告をする。

第５回：フランス語圏…「闘うフランス語」

最終回の小テスト。工藤が、ゲランド塩田についてのDVDを見せ、解説を加えつつ発音練習した。解説の際に参考資料を何冊か回したが、皆熱心に見ていた。カラー教材「その他の表現」を学ぶ。

フランス語圏に関する解説。カラー教材の「フランス語圏」・「フランス略年表」を用いて、フランス語圏について概観したあと、今日のフランス語圏が直面している問題を取り上げる。フランス語使用人口の減少を主として取り上げ、「闘うフランス語」と題してこの問題に関する取り組みを紹介した。再びDVDを用いて、フランス語圏マリの風景を見せ、具体的解説を加えつつ単語の発音練習を行った。

再びシャンソン« Aux Champs-Élysées »の歌唱練習。歌える部分がかなり増えた。「フランス語入門Ⅰ」への導入をし、最終回アンケートを実施した。

最終回アンケートでは、多彩な教材使用・文化背景の解説・復習小テストの実施・歌の反復練習、を評価する意見が複数ずつあった。総じて「学習意欲・旅行欲が高まった」という回答が多かった。他方、「実際に発音しているところが見られる動画の方がよい」「アルファベットの発音時間を増やして欲しい」という意見もあった。なお、工藤は第１・５回に参加した。

（文責　鈴木）

○「初歩のフランス語」 東京世田谷学習センター（夏期集中型授業）

2006年８月５日（Ⅰ～Ⅲ限）、８月６日（Ⅰ～Ⅱ限）

担当講師　井上　のぞみ

第１回：ABC

始めに授業の主旨を、「初歩のフランス語」と「フランス語入門Ⅰ」の違いを中心に説明した。初回アンケートによると、前期に「フランス語入門Ⅰ」を受講するも挫折してしまった人が数名おり、「初歩のフランス語」の集中授業が「フランス語入門Ⅰ」の予習・復習両方の役割を期待されていることが改めて確認できた。導入として世界地図上でフランスの領土やフランス語圏の広がりを確認した後、アンティル出身の歌手の曲を聴いて「パリのフランス語」ではないフランス語の音を体験させた。続いてABCの発音練習を行った。CD教材と並行して、発音のポイントを説明しつつ講師の口の動きに注意を促し模倣させたが、これが受講生には評判がよかった。rやgの発音のコツや、eとuの区別などに着目しつつ反復練習した。続いて単語や国際機関の略号のABC読みによる書き取りや意味当てクイズを行ったが、国際機関の略号への関心が高かった。略年表を用いてフランスの歴史や政治的立場を解説した後、自分の名前をアルファベットで綴らせて二人一組でABCの発音確認をさせた。最後に新しいDVD教材の説明をし、映像を見せながら紹介した。

第２回：あいさつ・自己紹介

まず、始めのあいさつの発音練習を通して、鼻母音や複合母音字の説明を行い、併せて綴りと発音の間の諸規則を確認した。次にDVDのVocabulaire pour les débutantsから*Voyage en Bretagne et retour à Paris*を見せ、画像に関連したフランス文化紹介をしながら単語や表現を発音させた。窓側最前列の受講生が角度的にテレビモニタの画面が見えにくいとのことで、教室の構造上の問題だが改善の必要性を感じた。また、後列の受講生は画面のテロップが見えにくいことがわかったので、次回からはプリントを配布する予定。

休み時間に童謡« J'ai perdu le "do" de ma clarinette »を流し、黒板にサビの歌詞"au pas camarade"（オパキャマラド）の意味説明を書いた。フランス語が身近になったという感想をもらった。続いて自己紹介の練習を行った。フランス人に名前を日本風に発音してもらう為の綴り方の工夫を解説し、綴り字と発音の関係を説明すると、受講生の関心が高まった。職業と出身地に関する表現を全員で発音し、二人一組で互いに自己紹介をしてもらった。最後に終わりのあいさつの発音練習と綴り字確認を行った。

第３回：パリ

まず、19世紀前半までの混沌としたパリの現状とオスマンの「大改造」について簡単に説明した。続いて、映画『パリのランデヴー』第２話からパリの公園の多様性を、第３話からマレ地区を紹介した。休み時間に« Aux Champs-Élysées »を流した。続いてDVDのExpressionsから*Connaissez-vous la France ?*を見せ、パリと地方の比較やフランス人のヴァカンスの過ごし方を紹介しつつ、主な単語をピックアップして発音させた。続いて１～12までの数と、カラー教材のイラスト付きカフェメニューを全員で発音した。終わりのあいさつの後、翌日のテスト範囲の説明を行ってその部分を宿題とし、一日目は終了。

第４回：日常的表現・フランス諸地方

テスト範囲を中心に総復習を行った後、カラー教材の「カフェにて」を全員で発音、次に二人一組になって会話練習させた。その他簡単なあいさつ表現を練習しながら、フランスにおける日常的あいさつの重要性

や、礼儀や常識の日仏間の違いについて説明した。続いてフランスの諸地方について、カラー教材、音楽、その他個人的に準備した資料を用いて概観した。共通カラー教材のフランス地図をプロジェクタで投影して解説すると、わかりやすいと好評であった。DVDのExpressionsから*À Guérande*を見せて、ブルターニュ地方の特色やケルト文化について解説し、テロップの中の単語を選んで発音させた。続いてLangue vivanteのカルカッソンヌのマルシェの映像を流しながら、土地や食文化の話をしつつ、随時単語の聞き取りや発音練習をした。

第５回：フランス語圏

始めに« Sur le pont d'Avignon »を流して歌の由来を説明し、綴り字と発音の関係に注意しながら全員でサビの発音練習を行った。続いてテストを行った(ABC書き取り、数字、カフェメニューの正しい綴りの選択、自己紹介)。全体的によい出来であったが、書き取りではF/R、R/L、B/Vの混乱が見られた。答え合わせの後、フランス語圏の概観的説明を行い、その多様性をカラー教材の写真で確認、プロジェクタを使いながらカラー教材に出てくる地名を全員で発音した。続いて、移民問題を歴史的背景に触れながら解説し、関連してライの« tellement n'brick »等を聴いた。DVDのVocabulaire pour les débutantsの*Voyage au Mali*を見ながらマリについて説明し、単語の発音練習をした。最後に井上が訪問経験のあるコート・ジボアールについて、音楽や写真・映像等の資料を用いて紹介した。

最終回アンケートによると、受講生は概ね達成感を感じ、満足している。集中型授業ゆえの負担感を減らすため、音楽や映像を随時取り入れる一方で、学習内容を必要最低限に絞る工夫が功を奏したと考えられる。ただ、新しいDVD教材に関連した話題の提供が必ずしも容易ではなかったことや、「盛り沢山」なノルマの中、重点の置き方に苦慮したのも事実である。また、「もう一度初歩を受講したい」「初歩Ⅱを開講してほしい」という声もちらほらとあり、「入門Ⅰへのステップとして、初歩レベルの講座がもう一段階あると安心だ」と感じる受講生も少なからずいることがわかった。

（文責　井上）

○「フランス語入門Ⅰ」　東京多摩学習センター（土日型授業）

2006年５月14日～６月11日、毎週日曜Ⅲ限

担当講師　南　玲子

履修者への初回アンケート結果

初回の最初に共通アンケートを実施し、授業の進め方について尋ねた。その結果は以下のとおりである。

１）「初歩のフランス語」の履修状況

履修者の３分の１が、前年度に開講した「初歩のフランス語」を履修していた。

２）放送授業「フランス語入門Ⅰ」の履修状況

「現在履修中」（単位認定試験の受験を視野に入れている）と回答した学生が４分の３を占め、４分の１は「特に受験予定はなく、視聴する程度」を選んだ。

３）面接授業に期待することなどの自由記述

発音の基本を押さえておきたいとか、放送授業でわからないところを直接尋ねる機会にしたいとかといった基礎的、補助的な学習を望む回答から、放送授業で学んだことを運用できるようになりたいという高度な内容を期待する回答までが混在し、希望が多様であった。そこで履修者の声を随時聞きながら授業を進めるように努めた。

４）フランス（語）に関する経験の自由記述

まったくの初心者と「初歩のフランス語」を終えた程度の人が多かったが、放送大学の過去の「フランス語Ⅰ」履修者や、かつて他大学でフランス語を学んだことのある学生もあった。旅行経験はほとんどなく、むしろフランスの芸術に興味がある、これを契機に話せるようになって旅行をしたいというように、今後フランス語を使う場面を具体的に思い描いている学生が多かった。

授業の進め方と内容

（アンケートでそれぞれが履修中、視聴中と回答した）放送授業を各自が予習することを前提に、面接授業では、基本的に教科書に沿って「今日の表現」、「文法」、「練習問題」、Expressionsを解説し、「復習プリント」とその回答を録音したCDを併用しながら、学生の理解を深めることを目指した。質問も随時受けつけた。

「今日の表現」に関しては、具体的な場面を設定してから学生を指名して、その場面に立ち会っているかのように大きな声で発音する機会とした。また「復習プリント」は、学んだ事柄を宿題に出し、次回に白板と音声CDを使って答え合わせをしてから次に進むという形で利用した。これは特に反復練習として効果的だったと思われる。

また、DVD「フランス語補助教材」は、３回目と４回目に、Vocabulaire pour les débutantsのなかから、*Voyage en Bretagne et retour à Paris*（フランス旅行の語彙）を２度ずつと、４回目にはExpressionsのなかから*À Guérande*（ゲランドの高校生の自己紹介）を１度流した。読み上げられるフランス語とその和訳をプリントにして配布したので、映像を見て想像をふくらませながら単語や表現を発音する機会にできた。時間に余裕がなかったため、授業の折り返しの時間帯に、なかば環境映像のように使わざるを得なかったのは残念だが、適宜内容に解説を加えることはできた。放送授業では見られない、面接授業ならではの映像だったので、学生の目にも新鮮に映ったようである。

第１回は第１課（ABCの読み方、発音規則）、第２

課（名詞の性、冠詞、複数形）を扱った。また「初歩のフランス語」のカラー教材を参考に、簡単なあいさつをまとめたプリントを配布し、発音を練習した。これを使って、以降のすべての回で授業の最初と最後にフランス語のあいさつを交わすことにした。第２回は第１、２課の復習プリントの答え合わせと補足説明をしてから、第３課（動詞être、アンシェヌマン、形容詞、女性形形容詞のオリジナルCD、動詞avoir）と第４課（第一群動詞の活用）を学習した。第３回は第３、４課の復習プリントの答え合わせのあと、第５課（部分冠詞、否定文中の部分冠詞・不定冠詞、第二群動詞の活用）を解説した。ここまでは１日２課のペースだったが、履修者と相談した結果、内容が難しくなりはじめるその後については、先を急ぐことよりも基礎を徹底的に理解することに決めた。第４回は第５課の復習プリントを丁寧に見てから、第６課（縮約形の復習、動詞aller、venirの活用、近接未来、近接過去、国名・国民名のオリジナルCD）と、第７課のなかから付加形容詞を取り上げた。前述の通り、第３、４回には補助教材DVDを見る時間もとった。第５回は付加形容詞の復習に加え、今後の学習に役立つよう、第８課の疑問文の作り方をひと通り学んでから、試験を行った。試験には思いのほか時間（授業終了までかけた学生は一時間弱）がかかり、最後に予定していた補助教材DVDの鑑賞は断念した。試験と同時に、最終回アンケートも全員に対して行った。

最終試験

最終日の試験問題では、復習プリントを参考に、授業で重点を置いた諸点を確認した。教科書と辞書の持ち込みを許可した。特に難しい問題ではなかったと思われるが、結果には多少のばらつきが出て、満点（と１箇所間違い）と７割程度の出来がそれぞれ３分の１強ずつ、３割前後の出来が３分の１弱と分かれた。３割しか正答できなかった学生たちも授業中には積極的に取り組む姿が見られていただけに、点数に反映されなかったことは残念である。

最終回アンケート結果

１）速度（早すぎる／ちょうどよい／ゆっくりすぎる、より選択）

４分の３が「ちょうどよい」、残りが「早すぎる」と回答し、「ゆっくりすぎる」はいなかった。

２）難易度（易しすぎる／ちょうどよい／難しすぎる、より選択）

半数以上が「ちょうどよい」と答えた。「易しすぎる」と「難しすぎる」は、試験の出来とは相関がないが、満点の層は全員が「ちょうどよい」を選んでいる。

３）オリジナル教材（練習問題、DVD、音声CD）の感想

（とてもよい／まあまあよい／あまりよくない、より選択）

半数以上が「とてもよい」と答えている。残りは「まあまあよい」で、これも試験の出来と関係なくばらつきがある。

４）基礎的な知識が習得できたか（十分に／ある程度／あまり、より選択）

半数以上が「ある程度できた」と回答した。満点の層に「十分にできた」が見られるほか、３割出来のなかに「あまりできなかった」と答えている学生がいる。この質問に対する回答は、試験の出来を反映している。

５）これからもフランス語学習を続けたいか（ぜひ／なるべく／特には、より選択）

「ぜひ続けたい」と「なるべく続けたい」が半々になった。分布は必ずしも得点に比例していない。

ほぼ満点の学生が授業進行の感想ではすべて中庸を選んだり、逆に「易しすぎる」と書いた人が７割出来だったり、試験結果と感想は傾向が一致しているとはかぎらない。また、テストは３割出来で、すべてネガティヴに「難しすぎる」「あまり習得できなかった」と書いていても、ぜひ続けたいと答えている学生がいたのは心強いことである。また、今後については「なるべく続けたい」という３割出来の学生は、今回の授業運営すべてに対して満足だったと答えている。
自由感想欄には履修者の達成感が記入されたものが多くあり、放送授業「入門Ⅰ」の補足としての役割のみならず、次のステップへの橋渡しにもなったという手ごたえが感じられる。

全体を振り返って

試験結果と参加状況を総合的に判断し、履修登録者全員に単位を出すことができた。日曜日に５週連続の講義となると、出席者にとって拘束がやや厳しかったかもしれないが、語学の習得という点では、各履修者の自習時間も授業の復習時間も十分にとれたことがとても良かったと思う。履修者も意欲的な人が揃っていたようで、初回に１名休んだ以外欠席はなかった。冬学期は今回とは異なり、３週連続で２コマ、２コマ、１コマという時間割が組まれている。進め方にはさらに工夫が必要になるだろう。

（文責　南）

○「フランス語入門Ⅰ」 東京文京学習センター（毎週型授業）

2006年５月25日～６月22日、毎週木曜Ⅳ限
担当講師　笠間　直穂子

授業の構成にあたって

面接授業「フランス語入門Ⅰ」は放送授業に対応しており、教材も放送授業の内容に即した教科書を用いるが、全５回の授業で教科書に収められた文法事項のすべてを丁寧に教授することは不可能と言ってよいだ

ろう。したがって面接授業では、その時々の学生に合わせて教科書の内容から取捨選択して授業を組み立てていくことが必要になる。

今回担当したクラスでは、授業初回にアンケートをおこなったところ、ほとんどの学生が「初歩のフランス語」を履修しており、放送授業「フランス語入門Ⅰ」の履修率も高かった。なんらかのかたちですでにフランス語に少しであれ触れた経験のある学生が大多数ということになる。また、アンケートの自由回答欄および直接学生に尋ねた結果から、早いペースで文法事項を消化していくよりは、随時質問を受けつけ、発音練習をおこない、わかりにくい部分は繰り返したり多少時間をかけて説明するといった、面接授業ならではの利点を活かした授業が望まれているものと判断できた。そのため、教科書の15課中、半量の８課（疑問文の作り方、疑問副詞の使い方）まで終えることをひとまずの目標として、質問時間を多めに取りつつ授業を構成した。

授業内容

各回の授業は、おおむね次のように進めた。

まず（初回を除き）前回の授業終了時に、その日の内容に相当する入門Ⅰ共通の復習プリントを配布してあるので、学生を指名して答え合わせをおこない、必要に応じて補足説明をする。

新しい課に入る。放送授業の「スケッチ」から、今回学習する文法事項をふくんだ文を適宜拾い、簡単なものであれば発音練習をする。ついで文法事項の説明をおこなう。教科書の例文を訳し、文法事項がどのように用いられているかを解説して、全員で音読する。この時点で発音のしかたに関して必要あれば説明を加える。

発音に関しては、「フランス語らしい」発音を完全にマスターすることはこのレベルでは難しいので、面接授業教材のCD、DVD等でネイティヴの発音を聴く機会を与えたうえで、発音練習のさいにはもっとも基本的な事項を重点的に、繰り返し説明する。すなわち、母音については、子音につづくeを、英語の連想からすべて/e/と読む学生がほとんどなので、「ウ」に近く発音するのが基本であることを強調する。子音については、日本語を母国語とする者に限らずフランス語圏外出身者の多くにとって発音の困難なrに関しては発音法を教えるていどとして、実用にあたってはむしろsiとchiの発音の区別（前者が難しい）に時間を割く。音声学的な精度は別として、この発音区別ができると「通じる」度合いがぐっと高まるからである。

例文を読み終わった時点で質問を受けつけ、それに応じて補足解説をする。Expressionsは場合に応じて取りあげる（初級者にとって発音しやすく汎用度の高い« Je peux? »、« Ça y est? »など）。「練習問題」はその場で時間をとって回答させるか、時間がなければ次回までの宿題とする。一回の授業で二課分進むことができるときは、ここで中休みをとり、後半で残りの一課を同じ要領でおこなう。

中休みの直後、後半をはじめるにあたって、リフレッシュも兼ねて補助教材のDVDを一部放映し、適宜解説する。今回の授業ではVocabulaire pour les débutantsから*Voyage en Bretagne*、*Voyage au Mali*、そしてLangue vivanteから*Monsieur Pachon fait ses courses au marché de Carcassonne*の冒頭部分を用いた。初回アンケートによればパリを中心にフランス旅行経験のある学生は複数いたが、ブルターニュの塩田での作業、マリの人々と風景、カルカッソンヌの市場の様子はそれぞれ興味深く映ったようで、おおむね好評を博した。また、教科書の文法事項に加えて基本的な単語をいくらかこのDVDから学ぶことができた。

このあと教科書に沿った授業に戻り、終了時にあらためて質問を受けつけ、復習プリントを配布する。

以上がおおまかな授業の流れである。

試験と最終回アンケート

最終試験は配布・答え合わせ済みの復習プリントの内容を中心に作成した。綴りを書かせる問題をふくめたので少し難しかったようだが、数字の聞き取りの正答率が比較的高かったのは面接授業ならではの成果と言えるかもしれない。最終回アンケートでは、授業の速度および難易度について「ちょうどよい」との回答が大多数を占め、全般に授業に対する満足度は高かった。自由記述欄では多くの学生が「面接授業の時間・回数を増やしてほしい」と書いている。教科書のすべてを終えることができないスケジュールなので、この希望は当然と言えよう。発音練習を繰り返しおこない、できるかぎり質問を受けつけた点については好評だった。

（文責　笠間）

授業報告　執筆者一覧（アイウエオ順）
井上のぞみ（立教大学非常勤講師、岩手大学非常勤講師）
笠間直穂子（日本学術振興会特別研究員、上智大学非常勤講師、立教大学非常勤講師）
鈴木　順子（明治学院大学非常勤講師、東京女子大学非常勤講師）
増原　綾子（大東文化大学非常勤講師、東京大学社会科学研究所研究支援推進員）
南　　玲子（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻教務補佐員）

（平成18年11月６日受理）